

「保育」の原点106

お母さんの人間関係と子ども(2)

文 葛西得男

text by Tokuo Kassai

内藤寿七郎著
『育児の原理』

育児の原理」より
 気持ちは持つてほ
 しいのです。それ
 が結局子どものた
 めになると考えれ
 ば、心にゆとりも
 でき、素直に出る

その子の気持ちを推察しますと、ここ数カ月は自分に手をかけてくれない母が、ひきつけた時だけは一日中枕元についてくれたし、それに妹が生まれて以来、母親代わりに行っている祖母と母が普段は何も話さないのに、「またひきつけを起したらどうしよう。そうだったら2人で一緒に医者連れて行こう」などと平素のことは忘れて話していたことを見聞きして、自分がひきつけを起すと母と祖母が話をしてくれらなると思い込んだのだと思います。母が子どものためにわれを捨てて、姑と話をする努力をするようになったし、もう毎日ひきつけを起す必要がなくなりました。薬も何も飲まずに治ってしまいました。これは決して極端なケースではなく、ただ年齢が2歳という低年齢では珍しいことでしょうか、家庭内の大人たちのほんのちよつとした対立がどんどんエスカレートして子どもの心身症を引き起こした例はたくさんあります。

嫁姑の問題はいろいろな要素が絡み合って難しく、きれいな事では片付かないかもしれませんが、感情的にもつれた時も、若くて柔軟性のあるお母さんに子どものために大きな気持ちは持つてほしいのです。それが結局子どものためになると考えれば、心にゆとりもでき、素直に出ることもできるでしょう。

保母さんの気持ち・母親の気持ち

ある保育園で、毎朝、必ず汚れたおむつのままで来る0歳児がいました。お母さんは教師だそうで、保育園に来る時間がちょうど排便の時間にあつかるのかもしれないが、赤ちゃんを預けると、お母さんはあつたど勤め先に向かいます。

いくらやさしい保母さんでも、神様ではありませんから、これでは面白くありません。「なんてだらしない母親だろう」と思うようにもなりません。

いつしか、毎朝、お母さんは黙って子どもを預け、保母さんも黙って受け取るという状態になってしまいました。こうなると、一番の被害者は当の赤ちゃんで、保母さんは特に意地悪する気はなくても、なんとなく扱いがぞんざいになり、かわいそうなことに、段々陰気な表情の赤ちゃんになってしまったのです。お母さんが「こういう事情でおむつが汚れています、お願いします」と一言断っておいたら受け取る方の気持ちも違っていたでしょう。お母さんと保母さんのコミュニケーションの良し悪しは、心の通う育児ができるかどうかを左右するくらい大事な問題なのです。大人たちの人間関係のもつれは2歳児のみならず、0歳児にも影響することがあります。

『育児の原理』より



Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
 1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
 1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松稲会 理事長に就任。
 松稲会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
 アップリカ葛西 副社長時代に国連環境計画 (UNEP) のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。